

# 江戸時代の 出雲国の神社参拝ガイドブック 『出雲神社巡拝記』とその版木

江戸時代後期、お伊勢参りに代表される社寺巡礼ブームのなかで、出雲国内でも出雲国三十三所巡礼（通称・出雲札）や、島根半島をめぐる島根郡三十三所巡礼（通称・島根札）が盛んとなった。

天保 4 年（1833）に印行された『出雲神社巡拝記』は、携帯用の横長の小冊子で、出雲国にある 399 の神社を、順を追って参拝できるようまとめたガイドブックである。松江の商人で歴史研究家でもあった渡辺 彝が、自ら版元となって松江で発刊した。



松江城下の末次にある須衛都久社から始まり、島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原・能義・意宇各郡を巡り、最後に城下の白潟にある白潟天満宮で終わる。

この巡拝記は、桜の木を削り抜き、両面に文字を刻んだ 75 枚の版木により刷られた。この現存唯一の 75 枚の版木は、平成 21 年、白潟本町の園山興造氏より寄贈を受けた。

松江歴史館所蔵

